

新譜 月 評 The Record Geijutsu Disc Review 器楽曲

J・S・バッハ…バルティータ第4番/同第6番
モーツァルト…幻想曲K475

CD 24



特選盤

田崎悦子 (P)
[カメラータ] CMCD28113
¥2940

濱田滋郎 ● Tiro Hamada

推薦 やや久し振りの感がある田崎悦子のレコーディング。本年3月、1925年製スタインウェイを弾いての録音である。バッハの《バルティータ》ニ長調および短調、加えてモーツァルト《幻想曲》ハ短調という選曲は、要するに、この人が「いま、録音しなくなった曲」ということなのであろう。彼女の場合、「モーツァルト・イヤーだから1曲は……」などという平均的(?) 思惑があつたなどは、よもや思われない。ちなみに、バッハの《バルティータ》は、数年来、リサイタルでは弾いていた曲だという。演奏は、期待どおりの見事さ、このピアノの「筋を通した」というべき格調の高さに終始すると言えよう。ペダルを抑えた澄明な音づくりを基盤に、舞曲それぞれのリズムをわきまえた生彩に富む演奏が繰りひろげられていく。もとより、舞曲形式を先んじるといふよりは、バッハが個々の曲(楽章)に与えた性格のほうを重んじた演奏でもある。たとえばニ長調の《サラバント》は粘着せずさりりとしているが、短調のそれは、沈滞した至高の嘆きぶしというニュアンスを伝えているように。総体に、装飾はあえて施さず、バッハならば「素」で触れ、

かつてのようには表現したいという気持がうかがわれる。それ故にこそ、ここに流れている「歌」は、最も自然な快さをおびたものになる。同様に、モーツァルトの《幻想曲》ハ短調も、構えることなく彫り込んで作品の心に触れた演奏だと言える。

なお井阪絳氏は「プロデューサー・ノート」の中で、つぎのように記されている——「田崎さんは、このニューヨーク・スタインウェイの特性を熟知されており、このピアノを自分の言葉話すように手懐けてきてくれたので、録音でピアノについて問題にする必要は、まったくなかった」と。

那須田務 ● Tsubomu Nasuda

推薦 バッハは《バルティータ》の第4番と第6番ともに一貫して高いテンションをもって奏でられた、きわめて個性的な演奏である。時として荒々しいほど攻撃的なのだが、といつて粗雑というわけではない。第4番の序曲はピアノの音に強いエネルギーが宿り、強調された付点は鋭利な刃物を思わせる。そこから駆け足で抜け出るようにフーガが始まるのだが、その瞬間が実に鮮やかだ。颯爽とした足取りと躍動感にはちきれんばかりの音の愉悅がすばらしい。アルマンドは穏やかで優しい表情をしている。上旋律は明るく時に惱ましげに、その他の声部はくぐもつた音色で各声部は異なつた音色を纏い、音楽は有機的かつ緻密に構成されて一分の隙もない。フランス風のクォラントは活気と熱を孕み、アリアのシンコペーションは明快でダイナミック。興味深いのはサラバントで、右手の旋律を空中で一瞬止めてみせる。メヌエットも角ばつたりリズムと切れ味のよいアーティキュレーションで奏でられる。いずれの曲も旺盛な活力に満ち、身振りが大きく、表現が明快で、楽曲の性格を際立たせると同時に、かつて一度も聴いたことのないようなオリジナリティに満ちているのだ。こうしたことは第6番にも言える。トッカータは第4番の序曲にも増してスケールが大きくなり、それに続



田崎悦子 (CDより)

Photo:Yoshiomi Goto

く個々の楽曲には新たな響きと性格が与えられる。音色のバレットの上には実に多彩な絵の具が載せられ、それを自在に使い分けて、多様な、生き生きとした情感を音楽に与える。これぞ現代のピアノで聴くバッハの醍醐味。

神崎一雄 ● Kazuo Kanazaki

「録音評」 やや華やかな響きを伴って独自の色彩感と清潔感を感じさせるピアノが眼前に在る、といった感じのピアノ録音。かろやかなサウンドはときにフォルテピアノ的に聞こえてきそうでもある。ワン・ポイント録音によってアタックと響きとのつながりがスムーズなのも快さを誘う。また録音セッションを1日で終えた集中力も注目できる。2006年3月7日、武蔵野市民文化会館小ホールでプロデューサー、井阪絳、エンジニア、宮田基樹の収録。